

た。そこで皆さんライオンの赤ちゃんを連れて戻りました。早速私がお連れしてライオンの小父さんにお渡しよくあやまつておきますもう大丈夫ですと申しました。皆も大層喜びましたお蔭であります

命は助かつたと兎吉に山程お禮を言ひました。兎

吉は皆と別れて一生懸命にピヨン／＼はねてライ

オンの小父さんのお家へ戻りました。ライオンの

小父さんと小母さんは只々心配そうに兎吉の戻るのを待つて居りました。小父さん今戻りました赤ちゃん連れて戻りましたとライオン赤ちゃんを小母さんに渡しました。二人は喜びましたよ。それは／＼てんてこまひして喜び涙をハラ／＼流して

兎坊ありがたう／＼と百も千もお禮を言ひました。このことをお月様が大空で見てゐらして、あゝ兎坊はよい子じや／＼と早速雲をお使にしてお

迎によこしました。兎吉も大喜びで雲にのりピヨン／＼はねて雲の中を空へ空へとはねて上りお月

様に行きました、そしてお月様の御殿でいつまでも／＼仕合にくらすやうになりましたとさ。

### 天狗の團扇

岡崎市熱岡幼稚園 安間公觀

或るところに、健ちゃんといふ——それは／＼元氣の好い子供がありました。

天氣の好い日に、たつたひとりで裏の山へ遊びにまわりました。——それは丁度秋のことでしたから、山には栗や松茸やしみぢが澤山ありました。

健ちゃんはさすが山の近くに住んでゐる子供だけあつて松茸やしみぢなどを見付けることが大變上手です。

「あや！こんなところに、また松茸があつたぞ。シ／＼はねて雲の中を空へ空へとはねて上りお月

と、ひとりで叫びながら、だん／＼山の奥の方へやつてまいりました。

暫くの間に健ちゃんは、もう両方の手に持てない位、澤山、松茸やしめぢを取りました。

「もう、僕、持てやしない。……よし／＼懷中へ入れてやれ。」

「汚るのもかまはないが懷中をねぢ込む……懷中がボコーン！」と脹んだ。

よし／＼これで好い。こんどは栗を拾つてやらう。

と、また／＼奥の方へ——ズン／＼／＼……やつて来ります。

「や！ や！ 栗の木があるぞ／＼……あや／＼栗の實が落ちてる／＼。」

こんどは帽子をとつて、その拾つた栗を帽子の中へ入れる。

「これは好い／＼。」

と健ちゃんは大よろこび、

「あや／＼、向うにもまだあるぞ。」

「あや！ ここにもー。」

「あや！ あちらにも。」

と、云つてゐるうちに、健ちゃんはほんとうに、山の奥へ迷ひ込んでしまいました。そして、今までにちつとも來たことのない、山道ばかりを歩いてゐるのでした。

あや、僕、いつの間にか變なところへ來ちゃつたぞ。)

氣の付いたときには、もう歸る道がわからない。「や！ 困つたな。」

いくら考へてもわからない。  
おすが元氣の好い健ちゃんも、少しばからさびしくなつてしまふりました。

「どうしてやらうかしらん！」

と、暫く立ちと立つたまま、思案にくれて居

りました。

そのうちにも日様は、だんぐりと西の山に、  
傾いてゐらつしやいました。

小鳥達が、自分の家へ歸つて行く姿も見えま  
した。

「あ……困つたな……」

と、健ちゃんは、ます／＼さびしくなつてまる  
りました。

自分の家へは歸りたし、道はわからないし、

「もうこりや、今晚はこの山の中で寝るより仕方  
がない。」

と、諦めて居りますとき、不意にうしろの方から

「健ちゃん！」

と、呼ぶ聲がする

健ちゃんは

「誰かしらん？」

と、思つて、ヒヨックトウしろを振り返つて見ま

すと、そこには、大きな身體をした鼻の高い天狗  
さんが、ヒヨコット、立つてゐらつしやるもので  
すから、健ちゃんはびっくりした。

「ちや！あなたは天狗さんですか。」

と、大きな聲で訊きますと

「あ、わしはこの山に住んでゐる天狗ぢや、お前  
はなか／＼元氣の好い感心な子供だから、今日は  
お前にこの團扇うちわをやらうと思つて來たのぢや。」

と、眞赤な團扇を、健ちゃんにくれました。

「僕にこれをくれるんですか。」

「うん！それをお前にやるが、その團扇はなか  
と、あきら諦めて居りますとき、不意にうしろの方から

「面白あぶい團扇ぢやぞ、……バタ／＼……ツと  
煽あふぐと、どんな大きな重いものでも、飛んで上に  
舞ひ上つてしまふんだ。」

「えッ！面白い團扇ですね、僕、こんな團扇がだ  
い好きなんです。——天狗さん。ありが度う。」  
と、健ちゃんはその團扇を頂いて歸らうとした

が、ひとつどっこい。やつぱり道がわからない。

「誰だッ？」

「うむ！ 然うだ、天狗さん、僕、家へ歸る道がわからぬいんですが、教へてくれませんか。」

と、思つてヒヨット振り向いて見ますと、それ

はまた健ちやんの知らない、大きな男でした。

と、訊ねますと

「よし／＼教へてやらう。」

と、天狗さんは、親切に教へてくれました。

と、元氣よく訊きますと。

「乃公か乃公はこの山に住んで居る山賊だ。」

「えッ山賊！」

健ちやんはびっくり致しました。

「山賊なんかにはあげられないよ。」

にして、自分の知つてゐる道までくることが出来ました。

「あーこれで好い、ここまで來れば大丈夫だ。」

と、やつとのことで安心を致しました。そして

麓のところまでまわりましたとき

「おい小僧！ お前の持つてゐる、栗や松茸をみーんななここへ置いて行け！」

と、あら／＼しくどなるものがありますから、

健ちやんは

と、大きな手で健ちやんの身體からだを、グツト握り締めやうとしたときでした。健ちやんは今天狗さんから貰つた團扇を思ひ出しました。

「うむ！ 然うだこの團扇でやつてやらう。」

と、バタ／＼ツと、その山賊を扇ぎますと、どうでせう。その山賊はまるで風車のやうに、ク

ル／＼＼＼ツと舞ひながら、上方へツーツと飛  
んて行つてしまひました。

「ちや／＼、面白いな……アツハツハツハツ  
ハ……」

健ちやんは下から眺めながら腹を抱へて笑ひま  
した。

家へ歸つてお父さんやお母さんに話しますと、  
お父さんやお母さんも、大變不思議に思つて、そ  
の天狗さんから貰つた團扇を、大事にく／＼しまつ  
て置くやうにちつしやいました。——健ちやんも  
大切なからであると思つたのですから、誰に  
もさはらせないやう、自分のお部屋へ、大事に  
く／＼しまつて置きました。

X X X

ところが或る年のこと——健ちやんの國と、隣  
りの國とが戦争をほつぱじめました。隣りの國は  
健ちやんの國よりもヅーツと大きいものですか

ら、兵隊さんも澤山ありました。

健ちやんの國は少しばかりの兵隊さんで、どう  
することも出来ませんでした。——王様始め、國  
中の人々は大變心配してゐらつしやいました。

「戦争をしようか、それともお金を納めて降参し  
ようか。」

と——、之を聞いたのが健ちやんでした。健ち  
やんは早速王様のところまでまわりまして  
「王様。どうぞ僕を兵隊さんにして下さい。そ  
して隣りの國と戦争をして下さい。」

と、申し込みました。

王様びっくりなさいまして、

「お前のやうなそんな小さなものが、兵隊になつ  
たところが何のしようもあるまい。また戦争に出  
るなんかとはもつての外だ。」

と、ちつしやいまして、てんで相手にして下さ  
いません。

「王様。大丈夫ですよ。僕には天狗さんから頂いた不思議な團扇があるんですよ。——その團扇さへ持つて行きや、千人や萬人の敵の兵隊ぐらゐは、屁のかつぱです。」

「何！敵は僅か心配するな。」  
と、何萬といふ澤山な兵隊を繰り出して進んでまゐりました。

健ちやんの方では、

と熱心に申しますと、

王様はそれをお聞きになりまして

「うむ、そんな不思議な團扇があるなら、いつべん戦争をしてくれい。」

と、おつしやいました。そして、健ちやんをすべ兵隊さんにして、隣りの國へ攻め行くことになりました。

「たとへ敵が何萬來ようと、この團扇さへ持つて居れば大丈夫だ。さあ進め！」

と、元氣よく進んで行きます。

「さあ、敵が見えたぞ、それ！突喊だ！」  
と、いふもので隣りの國の兵隊は、一度にドツト攻めてまわりました。

「よしこのときだ！」

と、健ちやんは真先に立つて、その團扇もつず集めて、一度にドツト攻め滅ぼさうと、それ／＼仕度を備へて居りました。

ところが、不意にこちらの方から攻めて行つたものですから、隣りの國ではびつくりして大騒ぎを始めました。

近寄る——バタ／＼……クル／＼……。

来るもの——来るもの——みんな團扇のために  
の方へ舞ひ上げられてしまふのでした。

健ちゃんは面白くて——たまらない。——そ

こうしてゐるうちに、隣り國の兵隊は殘らず舞ひ  
上げられて、まるで、木の葉が風に吹き飛ばされ  
てゐるやうでした。——そして上から下に落ちた  
ものは、みんな身體からだが碎くだけけて死んでしまいました。

健ちゃんは大勝利で勇ましく歸つてゐらました。

王様は大變健ちゃんの手柄を褒ほめめて、いろ／＼  
な御褒美を山ほども下くだすつたさうです。おしま  
ひ。

附記　この話は内容から言つてもまた時間の方から言つても、  
小學校二三年生程度のものと思ひます。けれど幼稚園の  
子供と云つても、その話のしょうで充分によろこばし、  
且つ満足されることを信じます、去る日私の幼稚園で

園児一同に話し聞かせて見たことでも成功したもので  
から、ちよつと筆にして皆さんの談話の資料に供し度い  
と存じます。

